



# JSTCT Letter No.90

Japanese Society for Transplantation and Cellular Therapy

一般社団法人 日本造血・免疫細胞療法学会

April 2023

## 目次

第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会（JSTCT2023）開催報告	ii - iii
2023学会年度 社員総会・評議員会 承認・決定事項等のお知らせ	iv - vi
ワーキンググループ新規メンバー募集のお知らせ／二次調査実施のお知らせとご協力のお願い	vii
看護部会企画「功労賞受賞に思うこと」	viii
私の選んだ重要論文「金沢大学附属病院 輸血部 山崎 宏人 先生」	ix
施設紹介「富山赤十字病院 血液内科」	x - xi
会員の声「岡山大学病院 血液・腫瘍内科 浅田 騰 先生」	xii
各種委員会からのお知らせ	xiii

### ● 2023学会年度分年会費のご納入について

[会員マイページ](#)からのクレジットカード決済が可能です。クレジットカード決済を利用されない会員の皆様には近日中に払込用紙をお送りいたしますので、今しばらくお待ちください。

### ● 本学会会員情報へのご登録内容変更につきまして

ご勤務先の変更等に伴いご住所、メールアドレス等会員登録情報に変更がございましたら、[会員マイページ](#)よりご変更いただくか、Eメール、FAX等にてお早目に事務局までお知らせください。

[→学会HP「登録情報の変更・休会・退会について」](#)

### ● ご登録いただいているご住所について

本学会では、会員の皆様に対する重要書類、学会総会抄録号などはご登録いただいている住所にお送りしています。宛先不明で返送されてしまった場合、それ以上の対応ができなくなるおそれがありますので、ご自身でのご対応をよろしくお願い申し上げます。

### ● ご登録いただいているメールアドレスについて

本学会では、皆様に対する各種ご案内の多くをEメールにて配信しておりますが、昨今、アドレス変更の届出漏れが多く、メールが不達となる会員の方も多数みられます。一定期間、事務局からのメールが届いていない方は、一度、事務局（[jstct\\_office@jstct.or.jp](mailto:jstct_office@jstct.or.jp)）までお問合せくださいますようお願い申し上げます。

【JSTCT事務局より】

## 第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会 (JSTCT2023) 開催報告

第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会 会長 赤塚 美樹  
(名古屋大学大学院医学系研究科 分子細胞免疫学 特任教授)

第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会を2023年2月10～12日、名古屋国際会議場にて対面を主体としたハイブリッド形式で開催いたしました。折しもCOVID-19の第8波が襲来しており、学会直前まで気が気でありませんでしたが、辛うじて収束のタイミングで開催することができました。リバウンド効果も手伝ってか、蓋を開けてみれば現地参加2,107名、全体では3,571名(過去最大)の方々をご参加下さいました。今回の学会は第44回学会総会から8ヶ月後の開催であったにもかかわらず420題もの演題登録を頂きました。このような皆様のご支援に支えられて、無事盛会裏に学会を終えることが出来ましたことを心より御礼を申し上げます。

今回は“Let's get excited about new technologies in transplantation and cell therapy”という壮大なテーマを掲げ、単一細胞のレベルで詳細な解析を行ってGVHD発症やCAR-T治療耐性の新たな機序を探る技術の紹介と、CAR-T療法の臨床の最前線、AIを用いた予後予測などのセッションを中心に企画しました。またPro・Conは3セッション設け、その全てにおいてオンライン投票を用いた参加者の意識調査や、ディスカッション前後で意見が変わった集団のAIによる背景解析など、新たな試みを取り入れました。さらに海外より9名の演者(現地参加6名、オンライン参加3名)をお招きして、最先端の情報をご紹介頂きました。7セッションで同時通訳(通訳者も会場通訳ブースでなく、オンラインで参加)も併用し、専門外の参加者も理解しやすいように配慮しました。また本学会ではおそらく初の“Meet the Expert”も6セッション設けました。以上のような様々な会長の野望に対して、プログラム領域リーダー・プログラム委員の方々が大変魅力的で素晴らしい内容へ昇華して下さいました。この場をお借りして深く御礼を申し上げます。

さて、久々の対面中心の学会ということで、参加者が現地で旧交を温めるとともに、熱いディスカッションを交わして頂けるように、そして一人でも多くの方に最後まで残って学会を盛り上げていただけるように、最終日は午後3時迄で切り上げました。このため初日のWG成果報告会の直後から2つのシンポジウム(HLA、SOS/VOD)、ワークショップ(AIを用いた研究)、JSTCT-KSBMTジョイントシンポジウム、一般口演演題7セッション等をフルに入れました。期待通り、初日から多くの参加があり、2日目も朝から盛況になりました。

シングルセル解析のシンポジウムは同時通訳も功を奏してか300名の参加があり、大変好評でした。またCAR-T臨床の最前線をテーマとした会長シンポジウムは、並行するプログラムを極力減らし、少しでも多くの参加者が情報を共有する場としました。オンライン参加が40%もあり過去学会との比較は困難ですが、872名の参加があり、本学会史上最大級の規模となりました。次に参加者が多かったのはワークショップ「PTCyハプロとCBT」でした。ポスターセッションは多くの方が参加できるように、ランチョンセミナーの直後に開催しました。現地参加

された方はごった返しているポスター会場を見て驚かれたのではないのでしょうか。また最後までテンションが途切れないよう、セッションの幕間にはその後のセッションの演者の顔写真を入れたPRを流しました。Pro・Conは座長の先生方が綿密なストーリーを練っていただいたお陰で大変白熱し、リアルタイムオンライン投票も手伝って、どのセッションも盛況でした。3日目の表彰式やプレナリーセッションでは、最終日の午後にも拘わらずWEB参加も含め350名もの方に参加いただけ、本当に良かったと思います。

最後に、特筆すべきは「細胞治療 産官学連携」のシンポジウムでした。集計によると参加者の過半数が企業関係の方であり、CAR-T細胞療法への企業の関心と熱意の高さを知ることが出来ました。産官学がさらに連携を進め、新たな細胞治療をタイムリーに届けられるようになることが期待されます。さらに企業の皆様には47もの共催セミナーを開催いただき、学会全体の多彩な企画を陰で支えて下さったことに心より感謝申し上げます。

今回はコロナの規制が残る中、いくつかの心残りな事がありました。今回もまた会員懇親会を開催できなかったことと、ポスター会場で飲食の提供ができなかったことです。評議員懇親会は人数を絞ってなんとか開催に漕ぎつけましたが、アクリル板あり、着席スタイルを取らざるを得ませんでした。それでも70余名が一同に会したのは3年ぶりであり、画期的な出来事であったと思います。今年は「徳川家康」がホットな話題ですが、会長招宴はガーデンレストラン徳川園で感染対策のもとで行いました。海外演者の方々には「大名道具」が並ぶ徳川美術館内をカクテルを飲みながら散策いただき、大変喜ばれました。次年度の第46回学会総会会長の谷口修一先生の際にはコロナ規制も完全撤廃され、もっと賑やかな学会総会になることでしょう。

最後に参加された皆様にご協力をお願いしたアンケート結果について少し触れたいと思います。回答総数は694名(WEB参加者は約3割)で、参加者全体の約20%でしたので、全体の意見を反映しているか判断は難しいところですが、全体の93%の方が何らかの形でハイブリッド形式とオンデマンド双方の存続を希望されていました。また44%の方がオンデマンド期間(約1か月)終了後も閲覧の希望がありましたので、現在対応策を検討しております。英語の同時通訳は39%の方が利用され、うち70%の方が役にたったと回答されました。今後、参加者の職種も加味してさらに解析し、次回以降の参考に出来ればと考えております。では2024年、東京で開催される第46回日本造血・免疫細胞療法学会で、会員の皆様と再会できることをとても楽しみにしております。本当にありがとうございました。

## 2023学会年度 社員総会・評議員会 承認・決定事項等のお知らせ

2023学会年度第1回定時理事会(2月10日開催)および2023学会年度定時社員総会(2月11日開催)において承認・決定されました事項(一部、上記以前の理事会、以後の理事会メール審議にて承認された事項含む)をお知らせいたします。

### I. 事業並びに会計について

2022学会年度事業報告並びに会計中間決算案、2023学会年度事業計画並びに会計予算案について審議され、決定・承認されました。

《決定・承認された会計決算案および会計予算案》

一般会計：2022学会年度中間決算案(※1)、2023学会年度予算案(※2)

特別会計：2022学会年度中間決算案(※1)、2023学会年度予算案

- 造血幹細胞(骨髄・末梢血・臍帯血、自家・血縁・非血縁)移植症例一元化登録フォローアップ／データ解析・利用事業
- 造血幹細胞ドナー(血縁・非血縁の骨髄、末梢血)採取事例一元登録フォローアップ／データ解析・利用事業
- 臨床研究推進事業
- 認定医制度事業
- 看護師研修事業
- 人材育成事業
- 第44回日本造血・免疫細胞療法学会総会(中間決算案 ※1)
- 第46回日本造血・免疫細胞療法学会総会(予算案)

※1 中間決算案は2022年1月～11月分の収支決算案であり、12月分を加えた最終決算案については、3月に評議員メール審議により承認された

※2 2023学会年度予算については中間決算の内容をベースに積算していたため、最終決算の確定に伴い一般会計のみ軽微な補正を行い、最終決算案と合わせて評議員メール審議により承認された

### II. 新評議員、各種委員会新委員長・委員等の選任について

2023学会年度からの新評議員(社員)、各種委員会新委員長・新委員等として、以下の方々が選任されました(以下、全て敬称略、順不同)。

#### 1. 新評議員(15名)：

[医師] 佐野弘純、上田智朗、田代晴子、吉藤康太、酒村玲央奈、橋本大吾、李 政樹、梅澤佳央、片岡圭亮、栗田尚樹、草壁信輔、加藤啓輔

[理学療法士] 武清孝弘、中村和司、木口大輔

#### 2. 次々期総会会長(令和8年・第48回学会総会)：

福田隆浩(国立がん研究センター中央病院 造血幹細胞移植科)

#### 3. 新名誉会員：

田中淳司

#### 4. 新功労会員：

安藤 潔、金森平和、橋野 聡、八田善弘、田渕 健、浅井治、小林直樹、石田也寸志、渡辺 力、田近賢二、中牧 剛、白藤尚毅

《次ページに続く》

## 5. 各種委員会 新委員長・新委員：

- 1) 在り方委員会：日野雅之(役職委員)
- 2) 理事評議員選任委員会：赤塚美樹(新委員長)、谷口修一(新副委員長)、橋井佳子、三宅亜矢
- 3) 倫理審査委員会：西本仁美
- 4) 看護部会：森 文子(新委員長)、山花令子(新副委員長)、尾形恵子、川勝和子、森 美都子
- 5) 認定・専門医制度委員会：東梅友美
- 6) HCTC委員会：小瀧美加、秋山典子、清水雅代
- 7) 財務委員会：日野雅之(役職委員)、森 文子(役職委員)
- 8) 賞等選考委員会：真部 淳(新副委員長)、塚越真由美
- 9) 学術集会企画委員会：谷口修一(役職委員)、後藤秀樹、犬童千恵子、稲本賢弘
- 10) 年次集会プログラム委員会：
 

谷口修一(新委員長)、内田直之(新副委員長)、衛藤徹也(新副委員長)、白鳥聡一、林 正康、前田高宏、山本久史、栗山拓郎、加藤光次、杉田純一、西田 彩、松岡賢市、松尾弥生、竹中克斗、森 有紀、成田 円、砂川伸悟、森 美都子、高木伸介、伊豆津宏二、松本公一、南 満理子、熱田由子、福田隆浩、高橋 聡、前田嘉信

※委員長(総会会長)指名の単年のプログラム委員のみ掲載

## Ⅲ. 表彰等について

## 《造血細胞移植功労賞(敬称略、順不同、所属は受賞時)》

[医 師] 加藤俊一 (東海大学医学部)

[医師でない者] 近藤咲子 (元 慶應義塾大学病院看護師長)

## 《日本造血・免疫細胞療法学会学会賞(敬称略、所属は受賞時)》

谷口修一 (国家公務員共済組合連合会浜の町病院)

## 《第44回日本造血・免疫細胞療法学会総会奨励賞(敬称略、順不同、所属は受賞時)》

岡崎幸治 (京都大学医学部附属病院 血液内科)

玉置雅治 (自治医科大学附属さいたま医療センター 血液科)

原田尚憲 (生長会府中病院 血液疾患センター)

赤川順子 (東京都健康長寿医療センター 血液内科)

栗山幸大 (京都第一赤十字病院 血液内科)

## 《2022年度 JSTCT Working Group Research Award(敬称略、順不同、所属は受賞時)》

黒澤修兵 (横浜市立市民病院 血液内科)

下村良充 (神戸市立医療センター中央市民病院 血液内科)

水野昌平 (愛知医科大学病院 血液内科)

西脇聡史 (名古屋大学医学部附属病院 先端医療・臨床研究支援センター)

## 《JSTCT2022若手優秀研究賞(敬称略、順不同、所属は受賞時)》

玉置雅治 (自治医科大学附属さいたま医療センター 血液科)

和田典也 (京都大学 血液・腫瘍内科学)

宮尾康太郎(安城更生病院 血液・腫瘍内科)

岡田陽介 (自治医科大学附属さいたま医療センター 血液科)

松田健佑 (東京大学医学部附属病院 血液・腫瘍内科)

濱田涼太 (京都大学医学部附属病院 リハビリテーション部)

《次ページに続く》

#### IV. 学会認定資格

##### 《日本造血・免疫細胞療法学会認定医 新規資格取得者》

[2023年4月1日付認定(敬称略、順不同)]

吉田秀樹、樋渡光輝、岡 知美、小島研介、福田貴規、阿部将也、新妻秀剛、齊藤繁紀、杉浦弘幸、城下郊平、松田健佑、河村俊邦、木田迪子、安永 愛、岡田和也、上野稔幸、佐藤 健、坂本謙一、小野林太郎、廣瀬朝生、北尾章人、岡本 翔、千葉晶輝、島津弥生、福島伯泰、石山みどり、中田継一、杉谷未央、諏訪部達也、藤原英晃、納富誠司郎、片桐隆幸、末松正也、竹内正宣、多田浩平、鈴木さやか、三崎柚季子、福原規子、浅田 騰、森谷京子、相澤桂子、油田さや子、大和玄季、安田峻一郎、横尾眞子、秋山康介、齋藤 慧、若松 学、小林真一、櫻井由香里、徳山貴人、八田俊介、松島 悟、熊谷拓磨、河田岳人、藤原悠紀、迎 純一、坂本宗一郎、大嶋宏一、川村俊人、志関雅幸、山口享祐、西森久和、松本玲奈、窪田博仁、外山大輔、森 正和、堀口拓人、古本嵩文、森田 薫、大塚泰幸、安部涼平、小林正悟、小澤孝幸、櫻田麻希、岡部基人、後藤秀樹、工藤 耕、木村勇太、松本謙介、百合野彩乃、口分田貴裕

##### 《日本造血・免疫細胞療法学会認定HCTC 新規資格取得者》

[2023年2月10日認定、認定HCTC(敬称略、順不同)]

本間祥子、中島友加里、山下奈津子、葛原文美、今仁由夏、榎本成美、原 美樹子、宮代浩子、稲垣紀子、柏木さつき、河内芳美、越後谷麻貴、船槻智美、池生瑛美、川崎莉奈、足立珠美、池田絵美、入江祐司、賀長孝子、小瀧美加、竹村 彩、宮本美樹子、岡本あゆ美、秋山典子、上成弥生、長坂奈緒子

[2023年2月10日認定、認定専門HCTC(敬称略、順不同)]

武田みずほ、川口真理子

#### V. 次回学術集会

##### 《令和6年度・第46回日本造血・免疫細胞療法学会総会》

総会会長：谷口修一（国家公務員共済組合連合会浜の町病院）

会 期：2024年3月21日(木)・22日(金)・23日(土)

会 場：東京国際フォーラム

## ワーキンググループ 新規メンバー募集のお知らせ ／二次調査実施のお知らせとお願い

造血細胞移植登録一元管理委員会

### ワーキンググループ (WG) 新規メンバー募集のお知らせ

今年もワーキンググループの新規メンバーを募集いたします。奮ってご参加ください。

今年度よりWG18-ドナー別(血縁・非血縁)・移植細胞ソース別(骨髄・末梢血・さい帯血)による移植成績とWG23-国際非血縁者間移植は合併し、WG18-ドナー別(血縁・非血縁)・移植細胞ソース別(骨髄・末梢血・さい帯血)による移植成績として活動することとなりました。

なお、メンバーには資格条件がありますので、日本造血・免疫細胞療学会ホームページの「[ワーキンググループ\(WG\)](#)」ページより「造血細胞移植登録一元管理委員会が設置するワーキンググループ運営に関する細則」・「WG新規メンバー公募案内」をご確認ください。

現在参加中のワーキンググループの異動を希望される場合は、学会ホームページの同ページ内「WG異動申請案内」をご確認の上、申請をしてください。

#### 【WG新規メンバー応募方法】

日本造血・免疫細胞療学会ホームページより申請フォームにて応募

- 申込期限 2023年5月31日(水)

#### 【WG異動申請方法】

異動申請書を日本造血細胞移植データセンター宛てにメールにて送付

- 申込期限 2023年5月31日(水)
- E mail 送信先 jdchct-dc@jdchct.or.jp

※書類に不備がある場合には、申請を受理できない場合があります。

### 二次調査実施のお知らせとご協力をお願い

2023年3月4日(土)にプレゼン審査を実施し、一元管理委員会で承認された二次調査研究につきまして、日本造血細胞移植データセンターが代行で二次調査を実施します。対象施設となった際は、ご協力をお願い申し上げます。(2023年度実施：2研究)

\*\*\*\*\*

#### ◎ WG2 急性骨髄性白血病(AML)【成人】

『乳癌/卵巣癌既往があるAML・ALL・MDS患者における同種移植成績及び移植後のHBOC関連癌再発/発症リスクに関する検討』

国立がん研究センター中央病院／京都大学医学部附属病院 渡邊 瑞希

#### ◎ WG20 GVHD以外の移植関連合併症

『同種移植後に発症するフサリウム症の臨床的特徴と予後予測因子』

自治医科大学附属さいたま医療センター 血液科 木村 俊一

## 功労賞受賞に思うこと

近藤 咲子（元 慶應義塾大学病院 看護師長）

この度、功労賞をいただき、これまでに多くの教えとサポートして下さった患者さんをはじめとする、多くの学会の皆様から感謝したい。

思い返せば、1993年に造血細胞移植病棟に移動になり、それから25年以上の間、血液疾患の患者さんとその治療に携わる医療従事者とさらにその面々をサポートする人々と歩む日々でした。造血細胞移植ができる病院は少なく、情報が得にくい状況で東京大学医科学研究所附属病院・東海大学医学部附属病院を各2時間見学し、各種のマニュアルをいただき自分の病院のオリジナルのマニュアルを作成したのをまだ思い出すことができます。そして、初代看護部会委員長の尾上さんと、フレッドハッチンソン病院に見学に行く機会を得ることができ、米国との無菌管理など多くの違いが分かりました。日本という米国とは違う環境であることを十分考慮して、この治療を受ける患者さんの安全を守りながら、QOLをあげていくケアがたくさんあることが分かり、一つ一つ実行して行こうと邁進した日々であり、そして少しずつでもそれが叶っていくのが嬉しく、充実した毎日であったと思います。また、多くの診療科の医師とも会ってきましたが、血液内科の医師は治療だけでなくケアに関しても知識もあり一緒に携わるなど度量の広い方が多いと感じます。そのおかげで、患者さんへのケアは良い方向に急速に進んでいったと思います。そして、同時に看護部会のメンバーとは全国の移植をする病院の看護レベルを上げるために、ケアの標準化に努め、地方の病院に講義に行くなど多くの時間を共にしました。病院や大学など組織の違いはありましたがそれを超えて、いつでも患者さんのQOLをあげていくケアについて語り合える仲間が得られたことは私の何よりの財産です。

現在は、「がん患者さんとがんの親を持つ子どものケア」を続けています。移植を始めた当初、AYA世代の患者さんが多くおられました。その患者さんの小さな子どもたちへのケアを考えることに至りませんでした。ここ10年の間に世の中も変化し、当事者であるがん患者さんだけでなく、その子どもたちへのケアをすることはとても重要になってきたと思います。これからも、自分のできることを少しでも続けていけたらと考えています。

学会のこれからのさらなる発展を祈念しています。



## 私の選んだ重要論文

Genetic testing in severe aplastic anemia is required for optimal hematopoietic cell transplant outcomes.

McReynolds LJ, Rafati M, Wang Y, Ballew BJ, Kim J, Williams VV, Zhou W, Hendricks RM, Dagnall C, Freedman ND, Carter B, Strollo S, Hicks B, Zhu B, Jones K, Paczesny S, Marsh SGE, Spellman SR, He M, Wang T, Lee SJ, Savage SA, Gadalla SM.

Blood. 2022 Aug 25; 140 (8) : 909–921.

ファンconi貧血に代表される遺伝性骨髄不全症候群 (IBMFS) は、様々な遺伝的因子の関与によって造血細胞の分化・増殖が障害され血球減少をきたす疾患の総称である。同種造血細胞移植は造血回復に対し有効であるものの、合併症の重症化や二次発がん増加の懸念があり、その適応や前処置は慎重に検討する必要がある。

IBMFSは血球減少に加えて、特徴的な外表奇形や内臓奇形などの身体所見を伴うことが多い。ところが、重症再生不良性貧血 (SAA) と診断された患者の中には、こうした特徴的な臨床所見が乏しいために、IBMFSであることが見逃されている例がある。本研究では、そのような見逃されているIBMFSの移植成績について検討された。

SAAとして造血細胞移植 (HCT) を受けた患者732名 (非血縁: 636名、血縁: 96名) に対してエクソームシーケンスが実施され、IBMFS関連遺伝子104個の生殖細胞系列遺伝子変異が収集された。病原性または病原性の可能性が高い (P/LP) バリエントを有する患者は未診断IBMFS、常染色体劣性遺伝子の単一のP/LPバリエントを有する患者またはX連鎖劣性P/LPバリエントを有する女性患者はキャリアと定義された。

121名 (16.5%) の患者において、42個の遺伝子にわたって113か所のP/LP一塩基変異または挿入/欠失と10個のコピー数変異が同定された。また、91名 (12.4%) の患者には、105個の意義不明のバリエント (dVUS) が見つかった。48名 (6.6%) の患者が未診断IBMFS (そのうちの33%は成人) と判定され、73名 (10%) がキャリアであった。

P/LPバリエントがない通常の後天性SAAと比較して、未診断IBMFSはHCT後の生存率が低かったが、キャリアでは差がなかった (IBMFSのハザード比 [HR]=2.13、キャリアのHR=0.96)。その傾向は、骨髄非破壊的前処置で移植を受けた患者に限定した解析でも同様であった ( $n = 448$ ; IBMFSのHR=2.39)。一方、dVUSと後天性SAAの間に生存率の差は認められなかった。なお、未診断IBMFS患者の死亡は、臓器不全に起因するものが多かった。

キャリアへの造血幹細胞移植は、通常SAAと同様でよいものの、IBMFS患者に対しては前処置等に配慮が必要になるので、すべてのSAA患者に対して、こうした遺伝子検査によるスクリーニングを行うべきであると提案されている。SAAの約7%に未診断IBMFSが同定され、その3分の1が成人例であった点は、内科医にも警鐘を鳴らす結果と言えよう。

金沢大学附属病院 輸血部 山崎 宏人

## 施設紹介

## 富山赤十字病院 血液内科

黒川 敏郎

富山赤十字病院は1907年に富山県で最初の病院として、全国に91ある日赤病院の中で6番目に開設されました。初代院長は東大から派遣されましたが宿舎から病院まで馬に乗って通勤したという話です。1996年に富山駅の北西1kmの現在地に移転しましたが、金沢からの北陸新幹線が富山駅に到着する直前に神通川を渡ったところで左に見えます。病院から東に立山連峰、西に神通川が眺められ心にやすらぎを与えてくれ



写真1. 富山赤十字病院と劔岳

ます。そばに富岩環水公園や富山県美術館があり市民の憩いの場となっています。写真1の山は劔岳2,999m、県民の誇りであり全国の登山者憧れの山です。病院は401床、常勤医師数78、研修医12(1学年6人フルマッチ)です。2021年度の日当たり患者数は入院304人(病床利用率75.7%)、外来846人でした。2021年に日本医療機能評価機構の病院機能評価の5回目の認定を受けました(3rdG:Ver.2.0)。富山市の二次輪番病院で3日に1度救急当直が回ってきて、2021年度に救急車が4,368台来ました。

血液内科は2010年4月に常勤医2名で開設しました。2019年から3年連続で後期研修医が上がってきてくれ現在は4人体制で診療にあたっています。写真2は2022年10月のもので、前列左から黒川、望月、後列左から中川、貫井、瀬尾(初期研修医)のメンバーです。2010年10月に同種移植の1例目を実施し、2023年3月までの13年間で238件(同種145、自家93)の造血幹細胞移植を施行しました。全身放射線照射TBIは当院で実施できず富山県立中央病院で15件してもらいました。協力体制にいつも感謝しています。

2018年に認定HCTCが生まれ、2019年4月に移植施設認定基準「認定カテゴリー1」を取得しました。富山県でカテゴリー1は当科のみです。2013年に日本骨髄バンク非血縁者間骨髄採取施設・移植診療科として、2014年に同末梢血幹細胞採取施設・移植診療科として認定されました。2023年3月まで骨髄バンクからの移植は64件(骨髄57、PB7)、バンクへの採取は49件(骨髄38、PB11)実施しています。全国のカテゴリー1診療科137の中で最弱小ですが、横の連携がよくて小回りのきくチームです。移植には多職種による総合的な力が必要とされますが、良好なチーム医療に支えられているからこそ移植件数をここまで伸ばすことができたのだと実感しています。写真3は2018年の移植100例パーティーのもので、昔の仲間も多く集まってくれとても盛り上がりました(コロナ前で別世界です)。2014年9月から移植後長期フォローアップ(LTFU)外来を実施しており、研修会を受講した病棟看護師4人が順に外来に下り

て力を発揮してくれています。2018～2022年度の5年間で月平均28件の管理料算定がありました。

当科の目標は移植に特化することだけでなく、全ての血液疾患の診療に携わり地域医療に貢献することです。そして当科の雰囲気を経験してもらうことで、血液内科に若手を惹きつけることができればと思っています。これまで当院で専攻医研修をした医師が4人いますが、幅広い血液診療に積極的に取り組む若者たちをサポートすることにより、彼らが非常に成長することを目にしました。今後も若い世代を1人でも血液内科に勧誘し、当科で専攻医研修をして羽ばたいていてもらえればと心から願っています。



写真2. 血液内科スタッフ



写真3. 移植100例記念パーティー (2018年)

## 会員の声

### 冷静と情熱のあいだ

岡山大学病院 血液・腫瘍内科 浅田 騰

九州大学の森康雄先生からバトンをいただきました、岡山大学の浅田騰です。森先生は私が研修医となってはじめての現場での指導医であり、抗生剤の使い方、CHOPから始まる化学療法の基礎をやさしく楽しく教えてください、今でもお会いすると当時の新鮮な気持ちに戻ります。

人類が新型コロナに慣れ始め、社会生活も徐々にコロナ前に戻りつつありますが、コロナ禍は私たちの心や生活、そして、医療に大きな変化をもたらしました。移植医療においては、ドナー様のコロナ感染のために移植スケジュールが変更となったり、移植後患者様でコロナ感染が長期化して治療に難渋したり、治療中の面会制限のために患者-家族-医療者の連携が不足したり、という様々な困難を経験しました。これらに加えて、スタッフ発熱による欠勤の恐怖に怯える日々を経験しました。しかし、これらの経験は私たちを確実に進歩させ、医療をPost-COVID-19 Eraにおける医療に変化させつつあると思います。人との接触を減らすための遠隔診療システムや診療手続きにおける無人化の拡充、web会議システムなど、これまで日本で遅れていた医療のIT化が強制的に加速され、DXが促進される気配を感じます。まさに「発明や技術革新は困難により生みだされる」ということを実感します。一方で、医療は生身の人に対して行われるもので、特に移植医療は人間の五感(特に六感)をフル活用して臨まないといけないものであり、私たちの仕事がAiにとって代わられるのはまだまだ先だと(勝手に)思っています。

さて、私と造血幹細胞移植の出会いがポリクリの時でした。それまでも、小学生の時に同級生が白血病で亡くなってしまったことが記憶に刻まれていて、血液内科にはぼんやりとした興味がありましたが、ポリクリで自家末梢血幹細胞移植を見た時に「これは！」という衝撃を受けました。当時、救命救急医も候補でしたが、血液内科医の先生方が、静かに、そして平然と白血球をゼロにし、血球を入れ替えるという、まさに「冷静と情熱のあいだ」というスタンスで治療をされる姿がとてつもなくカッコよく見えて、血液内科医に決めました。あれから20年が経ち、移植技術が大きく進歩して適応が拡がり、さらにCAR T細胞をはじめとした免疫療法が登場して日々、ワクワク・ドキドキが絶えません。こんなに面白くてやりがいがあって、さらに内科診療の極みとも言える血液内科の魅力をいかに後輩に伝えるか、これが私の最近の一番の課題です。もちろん患者様を助ける医療の進歩が最優先ですが、コロナ世代の医学生や若手の先生たちに血液内科の魅力を知ってもらい、未来の移植医療を生み出す後輩を一人でも増やしたいと考えています。

今回は、研修医時代から専攻医時代にかけて苦楽をともにした小田原淳先生にご登場いただきます。

**次号予告** 今回は、今村総合病院 血液内科 小田原 淳 先生です！

## 各種委員会からのお知らせ

### 【造血幹細胞移植患者手帳作成委員会】

#### ● 造血幹細胞移植患者手帳の改訂

造血幹細胞移植患者手帳についてのアンケート調査にご協力いただきありがとうございました。頂いたご意見を基に造血幹細胞移植患者手帳を改訂させていただきました。手帳の役割を明らかにするため「～地域全体でのフォローアップのために～」を追記しました。表紙の次にプロフィールと移植施設への連絡方法を配置しました。参考資料を閲覧できるようにQRコードを挿入しました。アントラサイクリンの蓄積量、看護師の指導内容、節目健診の記録、がん検診の記録の項目を追加しました。LTFU、地域連携にお役に立ていただければ幸いです。新しい手帳は各拠点病院から皆様方に配布されますので、お問い合わせいただければ幸いです。

委員長 日野 雅之

### 【看護部会】

- 「同種造血幹細胞移植後長期フォローアップのための看護師研修」は例年通り講義はe-learningで行い(7～8月頃)、演習は秋に対面(平日・東京)とオンライン(土曜)の両方で開催の予定です。開催要項については、近日中に学会HPで公開し、受講者募集を開始いたします(応募締め切り6月中旬～下旬の見込み)。
- 今年のAPBMTは10/26～29にインドネシア・スマランで開催です。看護セッションは3日目の10/28で準備が進んでいます。日本からもぜひ参加して交流しましょう。
- 造血幹細胞移植拠点病院の看護師代表者と看護部会委員との連携を強化して、看護師対象の基礎研修やLTFU研修会、学会総会の運営や情報発信の充実を目指していきます。ご協力をお願いいたします。

委員長 森 文子

一般社団法人 日本造血・免疫細胞療法学会 事務局

名古屋市西区那古野二丁目23-21-7d号(〒451-0042)

Tel: 052-766-7127 Fax: 052-766-7137 E-mail: [jstct\\_office@jstct.or.jp](mailto:jstct_office@jstct.or.jp) <https://www.jstct.or.jp/>